

カビールの言語について

橋本 泰元

1. はじめに

中世北インドにおいて社会的・思想的に大きな変革の時代に、低い社会階層に出現した在俗の宗教詩人カビール (Kabir 1398-1488 ころ) について、筆者はこれまで本論叢で継続して論考を発表して来たが、今回は、言語史的な側面から、カビールが形成過程にあったヒンディー語とその文学にどのように関わったかという点を中心に、彼の思想と文体をも視野に入れ考察して行く。

2. カビールと言語形式

カビール派の人々によって膨大な量の詩節がカビールに帰せられているが、カビールが、かつて一つの作品、あるいはたった一篇の詩節を著わしたかどうか、いかなる証拠も存在していない。カビールに帰せられる作品の数は、数え方で 40 から 80 以上に変わるのである。カビール派が、たとえば「真実在のカビール」(Sat Kabir)⁽¹⁾ が 5 歳のときから遍在していると信じていようとも、「真実在のカビール」自身が多く作品を書き表したかどうか断言できないのである。彼らは、「真実在のカビール」が口頭で著わし、そしてスラト・ゴパール、ドラムダースそしてバグゴージーなどの高弟が書き表した⁽²⁾ と思っている。

さらに、低位ジャーティの職工としてのカビールの社会的背景によって、彼が多かれ少なかれ文盲であり、少なくとも彼が読み書きの正式な教育を受けていない、という可能性がある。ある二行詩のなかで、カビールは次のように述べている。

masī kāgada chūvoṃ nahim̃ kalama gahī nahim̃ hātha |
cāri juga ke mahātama kabīra mukhahim̃ janāi bāta ||

(BI. *sākhī* 187)

墨や紙を私は触れない，〔この〕手はペンも執ったことがない。
四つのユガ（劫期）の威光を，カビールは口で説く。

書かれた言葉，とくに聖典全般——たとえ「ヴェーダ」であろうが『クラレン』であろうが——を，カビールは嫌悪する。

pothī paṛhi paṛhi jaga muvā paṇḍita bhayā na koi |
aikai aṣira pīva kā paṛhai su paṇḍita hoi || (PV. *sākhī* 19. 4)

本を読んで読んで世界が死に，

誰もパンディット（ヒンドゥー教学僧）にならなかった。

一つの文字，愛情の，それを学べばパンディットになれる。

聖典の権威と書かれた言葉に対するカビールの嫌悪の観念は，中世のタントラの伝統，とくにサハジャ乗 (Sahaja-yāna) 仏教徒スィッダ (Siddha) とゴーラクナート (Gorakhnāth <Gorakṣanātha) の弟子たちであるナート (Nāth <Nātha) 派のヨーガ行者たちに由来する⁽³⁾。中世初期，おそらく早くとも8世紀ないし9世紀から，ほとんど社会の下層出身であったスィッダやヨーガ行者たちは，自分の教えを当時の民衆語 (bhāṣā) ——西部アパランシャ語のある形態か，あるいは古ベンガル語——で説いていた。カビールは，ブラーフマン (バラモン) の聖語サンスクリットに対するスィッダたちの嫌悪感を共有しており，そのことが，真正ではないが伝統的に彼に帰せられている次の詩に表明されている。

samskr̥ta hai kūpa jala bhāṣā bahatā nīra |⁽⁴⁾

サンスクリット語は井戸の水，民衆語は流れる水。

スィッダやナート派ヨーガ行者の「言葉」(bāni <Skt. vāṇi) のように，カビールの「言葉」もほとんどが短く含蓄があり，簡潔なあまり意味が曖昧

であることがしばしばある。その韻律形式は、スィッドヤやナート派ヨーガ行者たちが用いた「ドーハー」(dohā) と呼ばれる二行詩と、「パド」(pad < pada) や「ラマイニー」(ramaini) と呼ばれる短い押韻詩である。

ドーハーはアパブランシャ語文学のもっとも特徴的な形式である。ドーハーはプラークリト語のガーター (gāthā) に取って代った。ガーターは、最後の音節あるいは各行 (ardhali) が長いが、ドーハーはそれが短く、しかも押韻を導入した⁽⁵⁾。この押韻する二行詩の詩形が、サハジャ乗仏教のスィッドヤたちが著わした「ドーハー・コーシャ」(Dohā-koṣa) に用いられた主要な韻律であった。この韻律は中世のジャイナ教のムニたちにとっても人氣があり、ラーマシムハ・ムニ (Rāmasiṃha Muni) の著わした『パーフラ・ドーハー』(*PāhuRa-dohā* 「二行詩の贈り物」⁽⁷⁾) のなかに明らかである。ドーハーは宗教文学では箴言詩の形であったが、民間の (grāmya) アパブランシャ語や西部ラージャスターニー語の古形の抒情詩でも用いられていた。西部ラージャスターニー語の古形で著わされているもっとも有名な民謡が『ドーラー・マールー・ラー・ドゥーハー』(*Dholā-mārū-rā dūhā* 「ドーラー王子とマールワニー姫の二行詩」) で、同様のドーハー形式で著わされた民間の抒情詩を多く含んでいる⁽⁸⁾。カピールは、一般民衆がつねに歌い引き合いに出していた民衆語のこのようなドゥーハーないしドーハーを数多く憶えていたに違いない。スィク教聖典『グル・グラント・サーヒブ』(*Guru-granth-sāhib*) 所収のカピールと他の聖者 (Bhagat < Skt. Bhakta) に帰せられるドーハーは、「サローク」(saloku < Skt. śloka) と呼ばれているが、ふつうは「サーキー」(sākhi < Skt. sākṣin) すなわち「証言 (句)」と呼ばれている。すなわち、この二行詩は究極の真実在の証言となる含蓄ある言説である、と理解する必要がある。同時に、サーキーは、それ自体、至高の真実在の唯一の証人である師匠 (guru) 自身の口から齎される聖なる「ことば」(sabad < Skt. śabda) と見なされている⁽⁹⁾。

詩篇の最終行で往昔の偉大な聖者の証言を請うという慣行は、古くから続いている。サハジャ乗スィッドヤたちが著わした「ドーハー・コーシャ」と「チャリヤー・パダ」(Caryā-pada)、あるいはナート派ヨーガ行者の「言葉」のなかに、このことは既に行なわれている。「チャリヤー・パダ」のなかで、カーンハ (Kāṇha < Skt. Kṛṣṇa) は、自身を「裸のカーンヒラー」と呼んでいるが、高名なスィッドヤであるジャーランダリ (Jālandhari) を証人と

して懇請している。証人として懇請されたスィッドは、詩人の師匠であったかもしれないし、そうでないかもしれない。しかし、その証人は完全な知識を授かったものと見なされている。すなわち、彼は至高の真実在と同一である「正師」(satguru<Skt. sadguru)の具象なのである。それゆえ、各サーキーは、暗黙のうちに正師の証言を指しているのである。『ビージャク』(Bijak)の最後のドーハーは次のように述べている。

sākhī āmkhī gyāṁna kī samujhi dekhū mana māhīm |
binu sākhī saṁsāra kā jhagarā chūṭata nāhīm || (BI. sākhī 353)

サーキーは知恵の眼、心の中で考えてみよ。
サーキーなければ、この世の争いに終りなし。

正師の証言は知識の本当の源であるので、ほかの知識根拠 (pramāṇa) の必要性をなくする。正師の証言は、聖典の証拠に代わって口承による直接的根拠であるので、徒な議論に終止符を打つ。サーキーは、たとえ書かれようとも本質的には記憶されるものである。サーキーは、サーキーによって打撃をくらい、その教えに浸透された人が暗証するものである。ドーハーという規定された詩形に収められても、サーキーは単に文学的ジャンルではなく、最高の真実を喚起する表現形態なのである。

カビールは、インドでサーキーの作者として知られており、彼に帰せられる詩節の主要な集成は、多くの詩篇を含んでいる。『グル・グラント・サーヒブ』は 243 サーキー、『パンチ・ヴァーニー』(Pañc-vāṇī) は 811 サーキー、『ビージャク』は 353 サーキーを含んでいる。最少の集成である『サルバーンギー』(Sarbhāṅgi) はカビールに帰せられる 337 詩篇のうち 181 サーキー¹⁰⁰を含んでいる。しかし、そのなかでも彼に帰せられるサーキーの数をもっと多い。その数は無数と言ってよく、『ビージャク』に次ように暗示されている。

jete patra banasapatī aura gaṅga kī raina |
paṇḍita vicārā kā kahai kabīra kahī mukha baina ||

(BI. sākhī 261)

木々の葉っぱ〔の数ほど〕、そしてガンガー川の砂〔の数ほどに〕。
 パンディット（学僧）はかわいそうに何が言えようか、
 カビールは口で〔それほどの〕教えを説いた。

3. カビールの秘教的な言葉

ヨーガ行者ゴーラクナートの弟子と自認していた、インドの各地にいた
 ナート派ヨーガ行者たちは、古アワディー語 (Avadhī) を除いてさまざま
 な方言を使った。とくにディンガル語 (Ḍiṅgal) (古ラージャスターニー語) と
 古ブラジュ・バーシャー語 (Braj-bhāṣā) が混ざったピンガル語 (Piṅgal) で
 ある。いっぽうカビール以前の多くのスーフィー (Sūfi イスラーム神秘主義
 者) たちは、バンジャービー語やアラビア・ペルシア語の語彙が混ざった
 古いヒンドゥイー (Hindui) 方言を利用していた。カビールが自分の聴衆と
 想像力にしたがってこれらの言語の一つ以上を用いていたことは確かであ
 る。また、われわれはカビールの論客としての能力——自分の聴衆に自己
 を合わせられ、敵対者の専門語を借用できる優れた能力を明らかにしなけ
 ればならない。その一例を以下に掲げる。

mīyāṁ tumha saum̃ bolyāṁ bani nahim̃ āvai |
 hama masakīna khudāi bande tumha rājasa mani bhāvai || ṭeka ||
 alaha avai dīna kā sāhiba jora nahim̃ phuramāyā |
 murasida pīra tumahārai hai ko kahau kahāṁ thaim̃ āyā ||
 rojā karaim̃ nivāja gujāraim̃ kalamaim̃ bhisti na hoī |
 satari kābe ika ghaṭa hī bhītari je kari jāṁnaim̃ koī ||
 khasama pichāṁni tarasa kari
 jiya maim̃ māla manim̃ kari phīkī ||
 āpā jāṁni aura kauṁ jānaim̃ taba hoi bhisti sarīkī ||
 māṭī eka bhekha dhari nāṁnāṁ tāmaim̃ brahma samāṁnāṁ |
 kahai kabīrā bhisti chorī kari dojaga hi mana māṁnāṁ ||

(PV pad *āsāvārī* 46)

ミヤーン（イスラーム教徒の貴人）よ、おまえに話しても無理だ。
 私は神の卑しい僕、おまえは贅沢が気に入っている。
 アッラーは初めに宗教の主〔であった〕、無理な教えは説かなかった。
 おまえの師匠と導師は誰だ、言ってみよ、
 〔彼らは〕どこからやって来たのか。
 断食し礼拝を続けるがよい、
 〔しかし〕カリマー（信仰告白の定型句）で天国は得られない。
 七十のカアバが身体の中にある、〔努力〕してみれば分かるだろう。
 主を見極めて心で慈悲をなせ、〔世俗の〕財宝を虚しいものと思え。
 己を知って主を知れ、そのとき天国に入れよう。
 一つの〔土塊の〕身体がさまざまな衣服を着ているが、
 すべてにブラフマンが浸透しているのだ。
 カビールは言う、天国を捨て地獄に〔おまえの〕心は傾いている。

カビールの言説のなかでは、タントラのハタ・ヨーガの術語は、すでに古い伝統的な意味から乖離していた。タントラ・ヨーガの行法は、仏教のスィッダたちからシヴァ派のナート派ヨーガ行者たちに継承される間にかなり変容した。ナート派の伝説的な開祖マツツェンドラナート（Matsyendranāth）またはマツチェンドラナート（Macchebdranāth）と弟子ゴーラクナートは改革者として登場した。ゴーラクナートは、彼に帰せられる語録によれば、外面的な実修法を廃止した。彼は、ジャーティ差別と同様に奇妙な神格の崇拝を排除し、無執着、清浄そして厳格な行為を説いたのであった。

彼らの目標は、不死に至る非限定的な、「自然生得」^{じねんしょうとく}である究極の境地に昇ることである。その逆説的な術語で表現される神秘的な状態が「サハジャ」(sahaja)なる境地である。この境地が、経験可能な世界の本質なのである。またヨーガ行者が最終的に獲得し永続する状態である無限の歓喜でもある。

この神秘的な真実在は、カビールの実修の中心にあるのであるが、さまざまな術語で表現されている。アッラー (allā), フダー (khudā), ハズラット (hazrat), ピール (pir) などのイスラーム教の術語もある。否定的な表現で「不可視」(alakh < alakṣya), 「無形相」(nirākār < nirākāra), 「無限」

(102)

(anant<ananta), 「無属性」(guṇātīt<guṇātīta) などヴェーダーンタ学の伝統を引くものもある。さらに「ブラフマン」, 「アートマン」, 「精髓」, 「自体」など抽象的な哲学概念を表す術語もある。「ことば」(śabda), 「奏でられざる」(anāhata), 「サハジャ」(sahaja), 「空」(śūnya) などのハタ・ヨーガからの直接的な借用語もある。最後の二語はキーワードである。

avadhū jogī jaga thaim̃ nyārā |
basai gagana maim̃ dūnīm̃ na dekhai cetani caukī baiṭhā |
paragaṭa kanthā māṃhaim̃ jogī dila maim̃ drapana jovai |
brahma agni maim̃ kāyā jārai trikuṭī saṅgama jāgai |
khai kabīra soī jogesvara sahaja sunni lyau lāgai ||
(PV pad *gaurī* 69)

アヴァドゥータ（遁世者）よ、ヨーガ行者は世俗から離れている。
彼は虚空に住し、覚知の座に座して世間を見ることはない。
表には襪褌布を身に纏い、心の鏡を見つめている。
身体をブラフマンの智火で焼き、
三本の脈管の合流点で目覚めている。
カビールは言う、ヨーガ行者の王は
サハジャ・シューニヤに専注している。

「サハジャ」の境地は、二元が融合しヨーガ行者が「サハジャ・サマーディ」(sahaja-samādhi「自然三昧」)において超越的な一者に到達したときに覚知される。

「空」という言葉も、もちろん金剛乗のスィッダたちは言及していた。ハタ・ヨーガにおいて、「空」は至高の真実在を指す「独存」(kevala), 「ブラフマン」, 「サハジャ」, 「無染」(nirañjana) と同義語となった。『ゴラク・バーニー』(*Gorakh-bānī*)¹¹に次のように述べられている。

sunni ja mām̃ sunni ja bāpa | sunni nirañjana āpai āpa |
sunni kai paracai bhayā sathīra |
nihacala jogī gahara gambhīra || (GB *sabādī* 231)

空は母，空は父，空はそれ自体無染なり。

空を覚知すれば堅固となり，ヨーガ行者は不動となって甚深なり。

カビールとナート派ヨーガ行者にとって，「空」は「サハジャ」と同義であった。「空」は至高の真実在と，個我がその真実在と合一できる「場」の両方の意味を持っている。

sāira nāṁhīm̐ śīpa nahim̐ svāti būnda bhī nāṁhīm̐ |
kabira motī nīpajai sunni sikhara gaṛha māṁhīm̐ ||

(PV *sākhī* 9. 18)

海もなく貝殻もなく，

〔月が〕スヴァーティ（牛飼座）〔にある時〕の雨の滴もない。

カビールは〔言う〕，真珠が出来る，「空」である頂上の洞の中に。¹²⁾

「不死の薬」は，タントラの理論において重要な役割をなす。「アムリタ」(amṛta) は，頭頂内部に想定される「千弁の蓮華」(sahasrārādala) すなわち「月」から滴り落ちる「甘露」と見なされている。ナート派ヨーガ行者は，「千弁の蓮華」から「甘露」が流れ出て来ると信じている。ヨーガ行者は調息によって「美酒」を中央脈管 (susumnā-nādi) を通して「千弁の蓮華」に上昇させ，そこで個我はそれを飲んで不死を獲得する。カビールは明らかにこのような表現を利用しているが，しかし，彼は「ラサ」(rasa)，「アムリタ」，「サハジャ・ラサ」などの言葉に違う意味を付与している。これらの術語は，いまやラーム (Rām < Rāma) の愛情，あるいはラーム自身の意味合いで用いられている。すなわちタントラの解釈は廃されたのである。真の聖者 (サント) にとってラーム自身が不死の唯一の妙薬なのである。

sākata maraiṁ̐ santa jana jīvaiṁ̐ |
bhari bhari rāṁma rasāṁ̐ina pīvaiṁ̐ || (PV pad *gaurī* 43)

シャークタ派は死んで，サント（聖行者）は生きている。

器一杯にラームの妙薬を飲んで。

4. カビール自身の言語

カビール自身の言語と、彼の言説がもともと著わされた言語の問題は、長い間議論的となってきた。『ビージャク』を英訳したアフマッド・シャー (Ahmad Shāh) によれば、カビールは自分の地域の言葉、すなわちバナールス (Banāras) とその近郊のミルザープル (Mirzāpur) やゴーラクプル (Gorakhpur) で話されていた言葉で詩作した。¹³ ゴーラクプル地域の言語はボージプリー (Bhojpurī) であり、ヒンディー語の東部方言で現在のウッタール・プラデーシュ州の東端地帯からビハール州の西端地帯にかけて、また北はネパールの国境地帯辺りまで使われている。しかし、グリアソンは、論文のなかで『ビージャク』にはボージプリー語の形跡はほとんどないと述べている。グリアソンの意見は、『ビージャク』の言語の基本は古アワディー語であり、それはカビールの次のサーキーに合致する、というものであった。¹⁴

bolī hamārī pūraba kī hamaiṁ lakhai nahi koya |
hamako to soī lakhai jo dhura pūraba kā hoyā ||
(BI *sākhī* 194)

私の言葉は東方の、私を誰も理解できない。
私を理解できるのは、本当に東方の人である。

また同論文でグリアソンは、北インドのブラジ・バーシャー方言の東側で話されているいかなる方言も「東部方言」と呼ばれており、アワディー語がしばしば「東部の」(pūrbi) とされている、と述べている。¹⁵ しかしながら、グリアソンとアフマッド・シャーが二人とも字義通りに解釈した上記のドーハーの意味は、明白とは言い難い。字義通りの解釈は、相応しいものとは言えない。誰も東部ヒンディー語を理解できなかったと考えるのは、単純過ぎるからである。P. チャトゥルヴェーディー (Paraśrām Caturvedī) は、「東の方向」(pūrab diśā) はヨーガ行者の目標である精神の究極的な状態を象徴している、と述べている。¹⁶ そこで、カビールの言う「東方の言葉」とは、神秘的な境地にあるヨーガ行者やスィッドたちにもみ理解可能な秘

教的な言語を意味することになる。実際、『ビージャク』のなかで、その遠方の地という言葉はチャトゥルヴェーディーの解釈を指示している。

pūrabā disā haṃsa gati hoi | (BI *ramaini* 5. 5)

東の方向はハンサ鳥の帰趨なり。¹⁷⁾

ラームチャンドラ・シュクル (Rāmcandra Śukl) に従って、多くのインド人学者は、さまざまな方言を自由に借用しているように見えるカビールの言語の混成的な性格を強調してきた。しかしながら、シュクルは、カビールの名状しがたい言語の特質は本質的にはカビール以前のナート派ヨーガ行者や巡歴する説法師たちが用いていたものに基づいていると結論を述べ、その言語を「サドゥーたちの言葉」(sādhukkarī bhāṣā) と呼ぶことを提案している。¹⁸⁾

『カビール・グランターヴァリー』(*Kabīr-granthāvalī*) を最初に編纂したシャームスダル・ダース (Śyāmsundar Dās) も、序文において、カビールの言語の混成的な特徴を、アワディー方言のほかにカリー・ボーリー (Kharī boli) 方言、ラージャスターニー語 (Rājasthānī) そしてパンジャービー語 (Pañjābī) で著わされた「言葉」を例示しながら強調している。そして、彼は、カビールの言語を「五種類の材料の混ざった乳粥」(pañcmel khicrī) と言っている。¹⁹⁾ S. K. チャタルジー (Chatterji) の見解によれば、カビールの詩は、東部ヒンディー語 (コーサーリー方言) とボージプリー方言が散見されるものの混成ヒンディー語 (いわゆるヒンドゥスターニー語) とブラジ・バーシャー方言で著わされている。²⁰⁾ この問題の難しさは、おもにテキストの伝承の不確実さに起因している。同一の詩節のさまざま異読が、しばしば方言差を示しているからである。P. チャトゥルヴェーディーは、同一の詠歌 (pad < pada) が『ビージャク』ではアワディー方言の特徴をもち、『グル・グラント・サーヒブ』ではカリー・ボーリー方言の特徴を備え、『カビール・グランターヴァリー』ではブラジ・バーシャー方言のいくつかの形態を備えていることを示している。このように主要な三つの伝本には一貫性がないのである。すべてが方言差を示しているのである。

当時の北インドに広まっていた複雑な言語形態を考慮すれば、カビール

が自分の方言のみで教えを説いていたとは考え難い。それではカビールの方言とはどのようなものであったか。パナラスの住人でイスラーム教徒として、彼はヒンドゥイー語のほかに少なくとも二つの方言、すなわちアワディー語とボージプリー語に親しんでいたに違いない。ボージプリー語は、たぶん彼の母語であった。しかし、彼はアワディー語すなわち「東方の言葉」(Pūrbi)にも通じていたに違いない。そのアワディー語は、パナラスを含むジャンプル (Jaunpur) のイスラーム王国の言語であったからである。このように、カビールの時代に、無学の民衆も混成言語であるヒンドゥイーを共通言語——バザールの言葉——として用いていたと思われる。

ドーハーの言語は、詠歌 (パド) やラマイニーの言語と異なっている。バルトワール (Barthvāl) が述べているように、「カビールの文体は、アパブランシャ語特有の詩形であったドーハーにおいてより古い形である」。西部諸方言 (カーリー・ボーリー、ラージャスターニー、パンジャービー) の形態は、サーキー (ドーハー) に多く、いっぽうブラジ・パーシャの形態は詠歌に多い。後者の事態は、そのジャンルの性格によって説明可能である。すなわち、詠歌は抒情的であり、すでにカビールの時代までにブラジ・パーシャ方言 (ピンガル) は優れた抒情詩の言語となっていた。サーキーの中のラージャスターニー語とパンジャービー語の形態に関して、バルトワールはシュクルと同じように、それらの方言は当時広まっていた「修行者たちの言語」を反映していた、という意見である。実際に、カビールのサーキーの言語は、ナート派によってゴラクナートに帰せられている語録『ゴラク・バーニー』の言語に似ている²²⁾。この西部方言は、おそらく、チャタルジーが「民間の」(grāmya) アパブランシャ語と名付けた「ドーハー・コーシャ」に由来するものである。興味深いことに、カビールに帰せられるドーハーと詠歌の方言差は、サハジャ乗スィグダたちが著わした「ドーハー・コーシャ」と「チャリヤー・パダ」の方言差に対応しているのである²³⁾。

カビールのサーキーの言語に対するナート派の言語と文体の影響に関してシュクルとバルトワールの意見に賛成しながらも、チャトゥルヴェデーは、このような多くのサーキーはドーハー形式の民謡や民間の物語詩に直接的な影響を受けている、と述べている。

実際問題として、『グル・グラント・サーヒブ』に収録されているセーナ

ー (Senā), ピーパー (Pipā), ライダース (Raidās) などカビールより年齢的に若く同時代と思われるサントたちが用いた言語は、極めて似ている言語である。マハーラーシュトラ (Mahārāṣṭra) 地方出身の 14 世紀の聖者ナームデーヴ (Nāmdēv) でさえ、『グル・グラント・サーヒブ』所収のヒンディー語詩においてこの混成的な西部方言を用いているのである。²⁴ 14 世紀から 15 世紀のあいだに、古ヒンドゥイーすなわち古カリー・ボーリー語は民衆的な宗教——非正統的で反バラモン教的——の教化活動に適った共通言語と認められるようになったと考えられる。

カビールは、東部地方出身であるので、当然ながら自身の詩篇に自身の方言を混入させたと思われる。バナーラスがボージプリー方言地域に位置しているので、カビールのサーキーの中にボージプリー方言が混入されていると推測するかもしれない。確かにそのような形態は稀にあるのであるが、しかしアワディー方言の影響が全体として見られるのである。その理由は、当時ボージプリー方言はいまだ書かれた文学を持たない話し言葉の段階に留まっており、イスラーム教徒の支配者が注目していなかった、と考えられる。アワディー方言の場合はそうではなく、シャルキー (Sharqī「東方」の意味) 朝支配下のジャンプルのイスラーム王国の言葉であった。西部およびデカン地方におけるヒンドゥイー語のように、アワディー語は、イスラーム政権支配以前にはすでに書き言葉になっており、教化活動の手段として東部地方のスフィーたちによって洗練され始めていた。²⁵ イスラーム教徒のジュラーハー (職工) としてバナーラス辺りに住んでいたカビールは支配的な広域言語であったアワディー語に確かに精通していて、おそらく地方のボージプリー語よりもっと親しんでいたものと思われる。しかしながら、彼がサーキーを純粋なアワディー語で著わしたと仮定できる根拠はない。より可能性があるのは、彼は混成的なヒンドゥイー語を用いたということである。

5. 詩人の「署名」

ドーハーと詠歌 (パド) は、本来的には独立詩 (muktaka) であり、それらを著わした詩人は、その詩篇の最終行に自分の名前を入れるという簡単な方法でその詩篇の「著作権」を主張できるのである。この、言わば「署

名」の方法は古い。サハジャ乗スィッタたちやナート派ヨーガ行者たちによって、この方法はすでに確立されていたものと思われる。「ドーハー・コーシャ」のなかに「導師サラハ曰く」(Sarahapā bhaṇanti) など定型句がある。この定型句が「バニター」(bhaṇitā) と呼ばれている。サハジャ乗とナート派の文献では、「バニター」は規則的にある訳ではない。「チャリヤー・パダ」では「カーンハ曰く」というようにより定型化されている。しばしば、スィッタである詩人の名前が一句の主語として、例えば「カーンハは美酒に酔い愉悅をなす⁸⁸」というように直接用いられている。

「ムドリカー」(mudrikā「印章」の意味)とも呼ばれている「バニター」の使用は、カビール以前の15世紀頃から北・中インドで一般的になったものと思われる。詠歌には多く用いられているのであるが、サーキーではバニターはほとんど用いられていない。「署名」がまったくないか、あるいは第1行の最初に「カビール」とだけ記されており、第2行にはほとんどない。このように、「バニター」は、詩句のなかで統語的な機能を持たない「印章」として用いられており、二重解釈を許す原因となっている。

6. 中世イスラーム時代の文学用語

14世紀から16世紀にかけて、スーフィーとくにチシュティー(Chishtī)派の影響のもとに、二つの方言が北インドと中央インドで文学用語として発展した。デッカ地方のゴールコンダー(Golkonḍā)における高度にペルシア語化されたダッキニー語(Dakkhinī)とウツタル・プラデーシュ州東部における純粋なアワディー語——実際にはアラビア・ペルシア語の語彙が少ない——である。前者は教養のあるイスラーム教徒の言語を反映し、後者は教育のあるヒンドゥー教徒の趣向に適っていた。これらの文学的な方言で著わされた作品は普遍的な性格を持っていた。スーフィーの作家たちはヒンドゥー教とイスラーム教の「二つの宗教」のあいだに架け橋を掛けようとしていた。これらの作品の多くはペルシア文字で書かれ、教養のあるヒンドゥー教徒とくにカーヤスタ(Kāyastha「書記」)のジャーティはそれらの作品に親しんでいたのである。

この間に、北インドの教育のない民衆は、それぞれの地域の方言を用いていたが、日常的な交流とくに低位ジャーティのヒンドゥー教徒と低位ジ

ャーティのイスラーム教徒の交流の必要性から共通語 (lingua franca) が諸方言のうえに重なった。共通語とは、これまで見てきたように、その起源はおそらくイスラーム教徒による支配に先立つものであり、諸国を遍歴するさまざまな宗派の聖者たち、とくにあちらこちらにいたナート派ヨーガ行者たちによって使われていた北西インド起源の混成語であった。当初から混成的であったヒンドゥイー語は、アラビア・ペルシア語の語彙を音韻的にさまざまに形を変えて容易に吸収した。ペルシア語化したヒンドゥイー語——のちにヒンドゥスターニー語 (Hindustāni) と呼ばれた——は、おそらく北西インドとビハール地方と中央インドを含むガンガー平原全域で、またマハーラーシュトラ地方の一部で話されていた——少なくとも理解されていた——ものと思われる。これらの地域全体では10世紀以降ナート派の教化活動が盛んであったのである。まさにこの柔軟性によって中世ヒンドゥイー語の古形は、社会的に虐げられた立場にあった民衆のあいだに新たなる思想と宗教を広める媒体となったのである。この言語は、ナート派と、また同様にスーフイーたちによって展開されていた反バラモン教的運動にとって主要な言語であった。デカン地方では、このヒンドゥイー語が、非正統的で反バラモン教的運動を強烈に展開していたマンバウ (Manbhau < Mahānubhāva) 派——この派は、崇拜様式には反対していたもののナート派の影響を受けていた——に知られていたようである。このことは、13～14世紀のマンバウ派のダーモータル・パンディット (Damodhar Paṇḍit) のチャウパディー (caupaḍī-caupāi) 詩によって確証される。この詩篇は、ナート派の思想への反論として著わされた。60のうち35チャウパディーがこの地方の主要な言語であるマラーティー語 (Marāṭhī) で著わされているが、25のチャウパディーがナート派とスィッダたちの言語——アラビア・ペルシア語の要素のない、ヒンディー語とマラーティー語の調和のとれた混成語——で著わされている。

このダーモータル・パンディットのチャウパディーは、非正統的な宗教家によって用いられる場合のヒンドゥイー語のたいへんな柔軟性を証明しているといえる。明らかに、ヒンドゥイー語は「サドゥーたちの言葉」として他のインド・アーリア語の諸方言の多くの借用語を含み同化することができたのである。ダーモータル・パンディットのチャウパディーがアラビア・ペルシア語の語彙を含んでいないという事実は、その起源がイスラ

(110)

ーム以前の時代であることを示唆している。

このように、古ヒンドゥー語はバラモン教的正統性とその社会体制を拒否する動きと強く結び付いていたといえよう。ヒンドゥー語は、ナート派がその宗教的・社会的抵抗運動を広めるために最初に用いてから、東部地帯やマハーラーシュトラ地方のような発達した文学用語がすでに存在していた地域でも広く用いられ続けたのである。換言すれば、古ヒンドゥー語は、本質的に、非妥協的な中世の変革運動の言語として出現したのである。

7. カビールの文体

カビールの文体について多くが書かれ、すべての批評家、とくに現代の批評家は、カビールの詩篇がヒンディー文学あるいはインド文学全体の中で最高傑作である資質、その通常ならざる活力と荒々しさを強調している。カビールは、インドの伝統的な意味における美文体 (kāvyā) からすれば、「詩人」(kavi) と呼ぶことはできない。彼が、韻律や修辞法 (alaṃkāra) について無知であるかあるいは無視しているように見えるばかりでなく、彼の荒々しい表現、彼の平凡な比喩が、複雑で洗練された伝統的な美文体に慣れた耳に衝撃を与えるからかも知れないからである。カビールの時代にはヒンディー語ははまだ幼児期にあり、彼はそれに厳しい試練を与え、自分の必要性に合わせようとした。H. ドゥヴィヴェーディーは、「カビールは言語の専制君主であった。その言語は彼の前でひれ伏し彼に仕えることも彼の意思に従うこともできなかった」と書いている⁷⁷。W. G. オールが述べているように、「峻厳とした思想と荒々しい文体のために、後代のバクティの詩人たちを彼と比較することはできない」⁷⁸。

他の詩人たちの場合よりもっとカビールの場合には、文体の特異な資質が、傑出していくぶん神秘的な個性を反映しているものと思われる。カビールは、伝統に関心を払わず、聴衆がどう感じようとも気に留めることなく、自己の内面の確信を躊躇することなく言葉にした。彼の荒々しい言葉、厳しい皮肉は、切迫している滅亡に気付くことのない惰眠を貪る人間に対する烈火の怒りだけではなく、その人間を覚醒させようとする懸命の努力を示している。「不可視なる、近づき難い愛しい」真実在に到達するため

の、「正師の矢」によって覚醒される個我の果敢な奮闘、個我のその旅の途上の危険と苦悩、個我の凄まじい孤独感、これらがカビールに扇動的な言葉注ぎ込み、そして、その言葉が彼自身の深い苦悩と経験を表現するのである。「越え難き峠」を越えた遙か彼方における——しかも人間の魂の深奥に秘められている——合一の言表不可能な歓喜、その秘密の恍惚境、すべての「二元」が完璧に解消する唯一なるものへの帰入、これらが奇妙な、ときおり不可解な言葉のなかに、示唆の特異な力を持って喚起されるのである。カビールの文体は、混沌とし不可解な場合であっても決して鈍くはなく、無類の魅力をもつ極めて自然な様子を欠くことがないのである。ドゥヴィヴェーディーは、現代の批評家の中でカビールの天才に最も深い洞察を示したと思うが、示唆に富んだ言葉を見出し、カビールの文体を「花のように優しく、金剛石のように堅固である」と表現している。そして、カビールの最上のサーキーとパドが金剛石のような資質、透明性、多面の輝き、そして純粋な金剛石の不可思議な光輝をもっていることは確かなのである。さらに彼のサーキーとパドは金剛石の鍔のついた矢のような貫通力を持っているのである。S. S. ダースの表現に従えば「それらは聴衆者の心を引き裂き、その場に残す」。伝統的な意味での「カヴィ」でないとしても、カビールは間違いなく偉大な詩人であって、神秘主義詩人としておそらく凌駕されることはなかったと思われる。

【注】

- (1) 拙稿「中世北インド民衆思想とカビール」『東洋学論叢』24, pp. (93) - (94).
- (2) カビールの各派については、Kedārñāth Dvivedī, *Kabīr aur Kabīr-panth*, Prayāg: Hindī sāhitya sammelan, 1965, Ch. 5 を参照。
- (3) 仏教サハジャ乗の師匠カーンハは、「チャリヤー・パダ」のなかで次のように述べている。
 jo maṇa goera ālā jālā | āgama pothī ṭhanṭhāmālā || (40. 1)
 心に映るはすべて虚妄。聖典、教本は誤謬の数珠。
 Per Kvaerne, *An Anthology of Buddhist Tantric Songs*, Bangkok: White Orchid Press, 1986. p. 231.
- (4) Charlotte Vaudeville, *Kabīr*, Oxford: Clarendon Press. 1974, p. 50.
- (5) Hazārīprasād Dvivedī, *Hindī sāhitya kā ādikāl*, Patṇā: Bihār rāṣṭrabhāṣā pariṣad, 1952, p. 93.

(112)

- (6) サハジャ乗仏教の師匠サラハ自身が、ドーハー韻律を次のように称賛している。

naū naū dohā-saddena na kahabi kimpī goppia.

新たなるドーハーの言葉によって、何も隠して言うことは出来ない。

M. Sahidullah, *Les Chants mystiques de Kāṇha et de Saraha: le Dohā-koṣa et les Caryā*, Paris: Adrien-Maisonneuve, 1928. p. 160, *dohā* 94.

- (7) 拙稿「カピールのドーハー（二行詩）：その歴史と教説」『東洋学論叢』21, p. (62)を参照。刊本は Hiralal Jain (ed. & trans.), *Pāhuradohā of Ramasimha Muni*, Karanja, Berar: Karanja Jaina Publication Society, 1938. である (Quoted by C. Vaudeville, *A Weaver Named Kabir*, Delhi: Oxford University Press, 1993, p. 111, fn. 4)。
- (8) 後期アパブランシャ語と西部ラージャスターニー語の古形による叙情的ドーハーについては、次を参照。Charlotte Vaudeville (intr., trans. & notes), *Les Duhā de Dholā-Mārū*, Pondichéry: Institut Français d'Indologie, 1962, pp. 46-7, pp. 116-18.
- (9) P. D. Barthwal, *Traditions of Indian Mysticism based on Nirguna School of Hindi Poetry*, New Delhi: Heritage Publishers, 1978 (1st ed. 1936), pp. 223-4. バルトワールは、sākhi と「証言」あるいは「権威ある言葉」を意味する *sabad* (Skt. śabda) がもともと同義語として使われていたようだと言っている。
- (10) 各々の主な参照ないし使用テキストは以下の通り。
『グル・グラント・サーヒブ』: Winand M. Callewaert (ed.), *Śrī Guru Granth Sāhib* 2 vols., Delhi: Motilal Banarsidass, 1996.
『パンチ・ヴァーニー』: W. M. Callewaert & B. Op de Beeck (eds.), *Nirgun-bhakti sāgar: Devotional Hindi Literature*, 2 vols., New Delhi: Manohar Book Publications, 1991.
『ビージャク』: Gaṅgāśaraṇ Śāstrī & Śukdev Siṃh (eds.), *Bijak: Kabircaurā-pāth*, Vārāṇasi: Kabirvāṇī Prakāśan Kendra, 1982.
『サルヴァーンギー』: W. N. Callewaert (ed. & trans.), *The Sarvāṅgī of the Dādūpanthī Rajab*, *Orientalia Lovaniensia Analecta* 4, Leuven, 1978.
- (11) Pitāmbardatt Barṭhvāl (ed. & trans.), *Gorakh-bānī*, Prayāg: Hindi sāhitya sammelan, 1942 (3rd ed.)
- (12) スヴァーティの時の雨の滴が牡蠣に入ると真珠が出来るという民間信仰がある。「頂上の洞」とはハタ・ヨーガの説く人体生理学で頭頂内部に想定される最高処で二元が融合する。
- (13) Ahmad Shah, *The Bijak of Kabir*, New Delhi: Asian Publication Service, 1979 (1st ed. 1911), p. 29.

- (14) G. Grierson, "The Bijak of Kabir," *Journal of Royal Asiatic Society*, 1918, p. 152. (Quoted by C. Vaudeville 1974, p. 63, fn. 4)
- (15) B. R. Saksena, *Evolution of Avadhi*, Allahabad: Motilal Banarsidass, 1937, p. 1. は、「字義通りには『東部の』を意味し、時々アワディー方言を意味するのに用いられることがあり、また他の場合にはボージプリー方言を意味するのに用いられる。pūrbi は、西部ヒンディー語から区別するために東部ヒンディー語の名称として適当かもしれない」と、この問題について慎重に述べている。
- (16) Paraśrām Caturvedī, *Kabīr sāhitya kī parakh*, Prayāg: Bhārti bhāṅdār, 1954, pp. 209-10; Dharmvīr Bhārti, *Siddha sāhitya*, Ilāhābād: Kitāb mahal, 1968, pp. 447-8.
- (17) ハンサ鳥は修行者の象徴。
- (18) Rāmcandra Śukla, *Hindī sāhitya kā itihās*, Vārāṇasi: Nāgarī Pracāriṇī Sabhā, 1945, p. 98.
- (19) Śyāmsundar Dās, *Kabīr-granthāvalī*, Vārāṇasi: Nāgarī Pracāriṇī Sabhā, 1928, Intro., pp. 71-5.
- (20) Sniti Kumar Chatterji, *Indo-Aryan and Hindī*, Calcutta: KLM Mukhopadhyaya, 1960, p. 203.
- (21) P. Caturvedī, 1954, pp. 205 ff.
- (22) Hazārīprasād Dvivedī, *Nāth siddhōṃ kī bāniyāṃ*, Vārāṇasi: Nāgarī Pracāriṇī Sabhā, 1957,
- (23) S. K. Chatterji, *The Origin and Development of the Bengali Language*, 2vols, London: Allen & Unwin, 1970-72 (Reprint of 1925 ed.), vol. 1, pp. 112-13. は、「ドーハー・コーシャ」の言語を西部（ジャウラセーニー）アパブランシャ語、「チャリヤー・パダ」の言語を古ベンガル語の一種であると分析している。
- (24) 北インドにおけるラーマナーンドの弟子としてのナムデーヴと、マハーラーシュトラ地方におけるジュンヤーネーシュヴァルの同時代の聖者としてのナムデーヴの年代に関しては、問題が残っている。Prabhākar Mācve, *Hindī ko marāṭhī santōṃ kā den*, Vārāṇasi: Nāgarī Pracāriṇī Sabhā, 1962を参照。ナムデーヴのヒンディー語の作品をおもにラージャスターニー語系語の『パンチ・ヴァーニー』諸写本をもとに校訂し英訳を付けた研究が、W. M. Callewaert & Mukund Lath (eds. & trans.), *The Hindī Padāvalī of Nāmdev*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1989.
- (25) ジャウンブルの東方の王国におけるスーフィーたちは、アワディー語を洗練させた。例えば、ベルシア語のマスナヴィー体に倣って民間の恋愛物語に取材した抒情詩『チャンダーヤン』(*Candāyan*) がムッラー・ダーワード (Mullā Da'ūd 1375年頃) によって著わされた。

(114)

- (26) Rāhul Sāṃkrtyāyan, *Hindī kāvya dhārā*, Ilāhābād: Kitāb mahal, 1945, p. 151.
- (26) C. Vaudeville, 1993, pp, 126-7, fn. 28.
- (27) Hazārīprasād Dvivedī, *Kabir*, Naī Dillī: Rājkamal Prakāśan, 1980 (1st ed. 1942), p. 221.
- (28) W. G. Orr, *A Sixteenth-Century Indian Mystic*, London, 1947, p. 74 (Quoted by C. Vaudeville, 1974. p. 69).